

## 「長兄の逝去」

2016年10月03日

宝塚で暮らしている長兄が85歳の生涯を終え、逝去した。重篤な状態で、明日緩和ケア病院に転院すると聞いていた27日（火）の朝早く、見舞いに行くため新幹線に乗った。車中で、義姉から「今、亡くなった」という電話を受けた。今年の5月に見舞いに行き、懐かしい話を交わすことができた。もう一度、生きていた時に会いたかったが、かなわなくなった。病院に行くと、眠っているような穏やかな顔をしていた。長兄の生涯を思い、神に永遠の命に包んでくださいと祈った。

長兄は病院嫌いで、病院に行かずにいたが、さすがに苦しくなり、病院に行くと言い出した。時は既に、末期の肺がんで、その他にも転移し、治療の方法がない状態になっていた。医者は自覚症状があったはずですが、我慢強い人ですねと言ったそうである。入院する時、家族が付き添うことを条件にしたという。義姉さんと3人の子どもと孫たち、ひ孫も加わり、亡くなる日までの3週間、24時間、付き添ったというから、驚きである。寂しがりやの長兄は家族から篤い看病を受けて、最期の時を過ごした。見舞いのつもりが、お通夜、告別式になってしまった。大勢の家族に囲まれ、心のこもった葬儀であった。

私たちの父は旧満州の大連で南満州鉄道に勤務していた。長男の兄は大事にされ、小学生、中学生の時は楽しい時を過ごしていた。大連での生活を嬉しそうに話していた。スポーツ好きな父は野球、剣道、スケートを習わせたそうである。兄はスケートが上手かったらしい。30歳代の頃、神戸の高校生のスケート選手たちと一緒に走り、一周だけは負けずに走れたと自慢気に話していたことを思い出す。

敗戦後、両親、子ども5人の7人家族は引き揚げ、その帰国途中、ソ連兵から荷物を奪われ、無一文からの生活を大分県杵築市で始めた。休耕田を借りて耕し、農作物を作り、父は慣れない商売をして、生計を立てた。長兄は進学がかなわず、両親を支える力となった。戦争の犠牲者と言えよう。当時、村の青年たちはダンスパーティーを楽しんでいた。夜になると、身なりを整え、髪をポマードで固め出かけていた。女性たちには満州帰り、おしゃれな長兄はもてたらしい。

18歳になって、田舎では生活できないと、神戸の川崎製鉄に入社した。義姉さんと出会い結婚し、3人の子どもが与えられた。その子どもたちが良い子たちで、今回の入院で、兄はどれほど助けられたことだろうか。豊かな生活ではなかったが、家族愛にあふれる家庭を作ったことは素晴らしいことであつたとつくづく思う。

10歳上の長兄は末っ子の私を、子どもの時から可愛がってくれた。東京の神学校から杵築市の実家に帰る時は、煙を吐く汽車で24時間かかった。ちょうど半分の所に位置する神戸の長兄宅に必ず泊まって、中休みした。義姉さんは優しい人で、いつもご馳走してくれ、特にうどんが美味しかった。弁当を作ってくれ、汽車に乗るのが常であつた。長兄夫妻にはお世話になり、心から感謝している。

次兄が昨年、亡くなり、残った3人兄弟は「3人になり、寂しいね」と言い合った。人は必ず、死を迎える。死を迎える時、その人の生涯が表れると言うが、そうであろう。長兄は戦争に行く年代に達していなかったので兵隊に取られることを免れたが、戦後の耐乏を強いられた。妻と家族を愛し、望むように生き死んだ人生であつたと思う。

親しい人の死に遭遇する時、自らの人生のあり方を問われる。自分の死に方を選び取ることはできないが、悔いのない今を生きることである。